されている。第四章――犯罪者の監獄と貧困者の監獄――では、犯罪者監獄と債務者監獄の陰惨な実態とそれらの目覚ましい近代化が取り上げられている。第五章――薔薇と堆肥――では、「岸の労働者」・「泥ひばり」・さらい屋・ごみ集め・煙突掃除少年・詩の大道商人・乞食・売春婦などの雑多な貧民が集中的に登場している。著者はこれらの貧民をロンドンという大輪の「薔薇の美しさを保つ堆肥」であると結論している。

本書は著者も認める通り、一世紀前の「他人の見た」ロンドンの断片を集成した著作であり、一貫した論旨に導かれてはいない。また史料も多くを当時の詩や小説から得ていることから、史実の正確な描写とはいえない。しかし、どこまでを史料の範囲に含めるかの問題が残るとしても、莫大な史料から抽出されたこの一九世紀のロンドン像は、急激な膨張に間断なく揺さぶられ、万国博の栄光や世界一の都市の美名の陰で犯罪と貧困とに深く蝕まれていた往時のロンドンを髣髴とさせる。それは他に類を見ない特異性を持つ都市の姿でもあった。一方、本書にみられる犯罪・貧困に視点を据えての都市研究は、産業革命期の犯罪に関する最近活発化した研究の動向からも注目される。さらに我国で最初にロンドンを限定的に取り扱った著作である点で、本書はイギリス史研究者にとって一読に値する書物であると言えよう。

（新書判　二二一頁　一九七八年二月　中央公論社　四〇〇円）　（江川志をり）

LA研究センター発行

『LA研究』四号・六号

本誌は、昭和四六年創刊以来、すでに六号をかぞえるラテンアメリカ研究誌である。LA研究センターとは、関西在住の若手研究者有志約十名から成る研究グループである。各会員の専攻は歴史・文学・経済・政治と多岐にわたるが、マリアテギと土地制度史の二点を共同研究テーマとして随時読書会がもたれている。

マリアテギ José Carlos Mariátegui（一八九四―一九三〇年）は、ペルー、否、ラテンアメリカが生んだ最初のマルクス主義思想家であり、丁度五十年前の一九二八年秋には彼によってペルー社会党（彼の没後、ペルー共産党と改称）が結成されている。『LA研究』四号（昭和五〇年冬刊）は、彼の代表的著作である『ペルーの現実解釈のための七つの試論』（*7 ensayos de interpretación de la realidad peruana*, 1928）の第一試論（ペルー経済概史）と第二試論（インディオ問題）を訳出したものである。第一試論によると、当時のペルーには原始共産制経済の残滓・封建経済・ブルジョア経済という三つの経済要素が共存していたが、ブルジョア経済はヨーロッパの資本主義から「技術」だけを取り入れ「精神」をなおざりにした、創造性に欠けるものであった。

マリアテギがペルーの歴史的変革主体に想定したのは人口の五分の四を占める「インディオ」（人種的概念ではない）である。第二試論において彼は、インディオ問題といわれるものが行政・人種・道徳・宗教・教育の問題ではなく実は土地問題であると結論づけている。これこそ彼のインディヘニズモの精髄であり、被抑圧原住民系大衆の政治的経済的復権（原住民共同体の創造的再生）によるペルーにおける社会主義へ

の道を展望するための原点となる。このような意味から、第三試論（土地問題）の翻訳が待たれる。

一方、六号（昭和五二年秋刊）で訳出されたのは、セーモ Enrique Semo（一九三一年―　）の小論文「メキシコのアシエンダと封建制から資本主義への移行」（"La hacienda mexicana y la transición del feudalismo al capitalismo," *Historia y Sociedad*, No. 5, Spring 1975）である。メキシコのアシエンダ研究は、一九七〇年代のメキシコ人研究者たちの精力的な調査活動により長足の進歩をとげ、今や個別的事例研究の段階から明確な分析視角と理論モデルに基づく総合研究の段階に進むべきときであるといわれている。メキシコ国立自治大学においてアシエンダ研究の中心人物として活躍中の同氏の最新論稿のいち早い翻訳・紹介は、有意義な試みであろう。

訳出された論文は、著者自身が「ミクロ研究」と規定しているとおり、起源・土地闘争・土地市場・農業ブルジョアジーの項目のもとにこれまでの個別研究の成果を整理したものであるが、次のような二つの新しい研究動向が看取できる。第一には、メキシコ一九一〇年革命の先駆者などが残した暗い停滞的なアシエンダ像――技術的後進・低生産性・ステイタスシンボル――を非歴史的解釈として斥け、十七世紀以降約三百年にわたってメキシコ農業＝経済の中核をにない、誕生・栄光・衰退を経験した一個の歴史的存在としてアシエンダを把握し直そうとする視点である。第二に、もっとも重要な点だが、アシエンダの自給自足的側面を強調するタンネンバウム Frank Tannenbaum 説や、これを批判してアシエンダを商業的組織と断定したフランク Andre Gunder Frank 説にたいし、セーモは自給部門と商業部門の「アマルガム」のなかにアシエンダの特質を求めようとしている。これは、タンネンバウムの封建制説、フランクの資本主義説に対する同氏の過渡期社会説（前資本主義社会から資本主義への移行）に通じる論点なのであるが、この小論文では理論的側面にはあまり重点が置かれてはいない。ちなみに、このためには、彼の主著 *Historia del capitalismo en México: Los orígenes/1521–1763* (1973) が参考となろう。訳文については印刷ミスや誤訳が若干見られはするが、巻末のあとがきや洋語文献目録（一九六五―七七年）も示唆に富んでおり、一読の価値があると思われる。

（B5判　平均四〇頁　一九七五・七七年
神戸市兵庫区湊川町八丁目七　原田方気付
LA研究センター　頒価各三百円）
（寄木芳夫）

『史林』投稿規定

◇資格　本会会員であること
◇投稿受付原稿の種類、長さなど
○研究論文・研究ノート
四〇〇字詰五〇枚程度
研究論文には四〇〇字以内の「要約」と、「英文要約」を添付のこと（研究ノートには両方とも不要）
○学会動向・批判と反省
四〇〇字詰三〇枚以内
○書評　四〇〇字詰二〇枚以内
○紹介　四〇〇字詰三枚程度